

伊藤廣之著『河川漁撈の環境民俗学

淀川のフィールドから』

俵 和 馬

本書は、大阪に住む者ならだれもが知っている淀川の、しかしあまりに知られていない川漁師の漁撈に関する環境民俗学的研究である。筆者の伊藤廣之氏（以下、伊藤氏）は、大阪歴史博物館の前身である大阪市立博物館に、昭和五年（一九八〇）に学芸員として就任された。その後、大阪歴史博物館の副館長として長らく活躍され、平成三〇年（二〇一八）の退任後も、大阪を中心に民俗研究をされている。伊藤氏は一九九〇年代から淀川をフィールドに民俗調査を進められ、その膨大な仕事の成果は、平成二八年（二〇一六）に佛教大学大学院文学研究科へ、「淀川における河川漁撈の環境民俗学的研究」として提出された。本書はこれに加筆修正を加えられたものである。

本書の構成は、以下の通りである。

はしがき

序

第一部 課題と方法

第一章 河川漁撈研究の課題

第二章 環境民俗学の視点と研究方法

第二部 淀川における河川漁撈の展開

第三章 淀川の環境と河川漁撈の歴史的展開

第四章 淀川淡水域における川漁師の河川漁撈

第五章 淀川淡水域と汽水域における川漁師の河川漁撈

第六章 淀川河口域における河川漁撈と川漁師

第三部 淀川における漁撈技術と川漁師の世界観

第七章 河川漁撈と遊水地漁撈

第八章 漁場利用をめぐる慣習と漁場観

第九章 川漁師からみた淀川と自然観

結語

（付編）

ここで、評者の考えを交えつつ各部を概観する。第一部では、生業研究史と河川漁撈史の整理し、新たな生業研究における環境民俗学的重要性と伊藤氏の研究法を示している。生業研究史の整理では、その枠組みの変化、すなわち、単一の生業における個別事例の羅列から、生業の連続性・複合性・総合性をみる仕方への変化を指摘している。また、この流れから生じた複合生業論やマイナーサブシステム論など、新たな研究法・分析枠を紹介している。河川漁撈史の検討では、それまでの「漁撈道具・技術へのこだわり」から、「漁師にとって漁撈や川とはなにか」といった心性を見つめ直す志向があることを指摘した。これらのことは、近年の生業にまつわる研究が、その技術・経済的側面を超えて、生業の持つ意味や担う者の自然観・生業観を問うものとなっていることを読者に伝えている。そして、新たな生業研究のなかで、自然環境を研究の射程に入れた環境民俗学の必要性を説き、いくつかの流派を比較検討してい

る。具体的には、野本寛一の生態民俗学―自然環境に日本民俗の源流を見出す仕方―、篠原徹の民俗自然誌―民俗誌と自然誌の融合による心意のなかの自然の究明―、鳥越皓之の環境民俗学―生活者の立場からみる環境と人の関わり―の解明―、菅豊の人と環境の民俗誌―コモンズにおける資源維持管理からみた人と自然環境―という四つの視点である。

これらを踏まえ、伊藤氏は以下三点の問題設定をおこなっている。まず、川漁師の環境認識はどういうものかという「自然観・環境観の問題」、次に川漁師同士の漁場や縄張りを含んだ交渉の実態はどのようなものかという「漁撈観の問題」、そして環境変化のなかでいかに漁撈活動を維持したのかという「生き方の問題」である。これらの問題設定に應えるため、川漁師たちのライフヒストリーを拾い上げ、淀川の漁撈を「人の生」として追求すべく、本書は進んでいく。

第二部では、伊藤氏による長年の調査研究の成果が遺憾なく発揮されている。まず、淀川の河川環境と河川漁撈の歴史の変遷について、文献資料を中心に紹介する。そして、淀川を大きく「淡水域」、淡水域と汽水域の折衝点たる「可動堰周辺域」、「河口域」に分け、それぞれの水域でのフィールドワークや川漁師からの聞き取りから河川漁撈の実態を明らかにしている。

淡水域は木津川、宇治川、桂川の合流地点から長柄の可動堰までを指す。ここでモクズガニを中心にコイやウナギなどを捕らえる川漁師のMさんの漁撈活動を紹介している。網やモンドリ、竇建てなどさまざまな漁具・漁法をもって漁撈活動がおこなわれていた点や、魚介類の生態を熟知し漁撈活動をおこなう民俗知識の紹介も注目されるが、ここで特筆すべきは、セシタやヨコアナと呼ばれる秘密の漁場をめぐる関係性―漁場の秘匿と他の漁師による「盗み」―である。これは従来の生業研究では捉えにくかった事例である。

淡水域と汽水域での漁撈活動を紹介する章では、河川の水質汚濁を受け、可動堰下流へと漁場を移したAさんからの聞き取りが中心となる。伊藤氏の指摘するように、このエリアは潮位や風向といった自然の作用だけでなく、堰の開閉による水量の増減という人工の作用を受ける特有の環境である。これは複雑な塩分濃度の変化を生むのだが、この水域で活動する漁師たちは、両作用を認識し新たに民俗・漁撈技術を編んできたのである。以上のような川漁師の環境認識に加え、漁場を移転したAさんが他の漁師との摩擦を生まぬために、漁具・漁法を新たに導入し、住み分けを図ったという話も大変注目される。これは、川漁師の世界における人間同士の関係性を示す語りである。

河口域では、貝類やウナギの漁をおこなうTさんの活動を紹介している。人工の水界である新淀川には、ヨシ原の形成とイリと呼ばれる細流の発生といった環境変化が生じた。また、この変化が堤防と河川のエコトーン（推移帯）に相当し、これを川漁師がいかに認識し、漁撈が行われたかを明らかにしている。ここでは、生態学や環境学の概念を生業研究に取り込むことができる環境民俗学の強みが表われている。戦前まで河口域では貝類の漁撈が主であったが、戦後の水質悪化に伴い、ウナギ漁に移行していったという。その際、淀川のエコトーンが重要な漁場となったのである。また、可動堰周辺域と河口域で、川漁師がウナギ漁に関して異なる民俗知識を持つ点を指摘している。同じ漁具を用いる際にも、堰やエコトーンの有無、川幅の違いなど、水域の環境の差が民俗知識の源流となったことを明らかにした。

第三部では、これまでの調査内容をもとに、淀川での河川漁撈を概観し、川漁師たちの世界観・自然観を示している。まず、淀川における河川漁撈の性格を鮮明にすべく、淀川水系の遊水地である巨椋池での漁撈との比較検討を行っている。ここで、巨椋池には見られない竇建て漁、シバズケ漁、曳き網漁、カ

ニカゴ漁を取り上げ、これらの漁法が「河床とそこを流れる水の状態」と「魚類等の生態・習性」という諸要素により支えられるものであると述べている。特に前者の要素は、人工水界である淀川の複雑性をさらに伝え、水の増減や塩分濃度の変化に対応してきた川漁師の感覚的世界を、きわめて実証的に紹介するものである。

そして、これまでの事例を統括し「自然と人間の関係性」と「人間と人間の関係性」を捉えている。前者は、「秘密の漁場」に対する認識と、魚と川漁師の自然観にもとづいている。伊藤氏は、川漁師の秘密の漁場を、占有の概念から紐解き、秘密の漁場は社会的承認にもとづく個人占有とは一線を画していると指摘している。「米櫃」と呼ばれる秘密の漁場では確実な漁獲が期待されるため、非常時以外に漁撈されない。この営みを、日常の漁場と非常時の漁場の「二段構えの漁場利用」とし、ここに川漁師の漁場観を見出している。更に、Mさんの述べた「ジャコのことジャコに聞け」という言葉から、川漁師が自然を自らと対等なものとして捉えていることを指摘し、自然観を明らかにしている。また、後者には漁場の占有と奪取という相反する関係が見えると伊藤氏は述べている。暗黙のルールを守りつつ、時に「出し抜くような」仕方では生きてきた川漁師の姿がドラマチックに浮かび上がっている。ライフヒストリーを研究の根幹とした伊藤氏ならではの分析であろう。

最後に、評者の考える本書の意義を、短く二点ほど述べていきたい。第一に、ほとんど実態として捉えられてこなかった淀川の漁撈に関する聞き取り内容は、なにもものにも代えがたい民俗学上の成果といえる。伊藤氏は、「淀川に川漁師ついていたんですね」という言葉を幾度も耳にしたと述べている。まさに本書を手にとった読者の脳裏にも同じ言葉がよぎったであろう。かくゆう評者も同じ感想をいだき、猛省したとともに本書の重要性を噛み締めた。地方の山

村・漁村に残る古き文化を、伝統的に追い求めた民俗学は、日々変化せざるを得ない都市を研究の対象とすることに苦心してきたが、まだまだ歩みは遅い。その間に大都市大阪を流れる淀川に、これほど多様な生業観があったということが忘れ去られていたかもしれないのである。本書は、民俗学全体への警鐘を鳴らすとともに、新たな展望を示しているようにも感じられる。

第二に、生業研究において重要視されなかったライフヒストリーという概念を採用したことで、これまでにない漁師の世界を描き出している点である。たとえば、「水死体の搜索を川漁師が手伝った」、「逃げたウナギをすぐさまウナギ力キで捕まえた」という聞き取りは、従来の技術史重視の生業研究では捨て置かれていた。なぜならこれは、漁撈技術・漁撈習俗の問題ではないからである。しかしながら、これほどまでに川漁師たちの「腕のよさ」が伝わる語りはないだろう。生業を経済活動という枠から解放し、ひたすら人の生として捉えたことで、「顔の見える生業研究」を生み出した功績は大きい。また、伊藤氏の生業研究は都市に特有の民俗が見られるという興味深い事例も掘り起こしている。「シバツケ漁で用いるシバの材料であるシキミを葬儀会社から入手していた」という語りはその一例である。伝統的な河川漁撈をおこなう川漁師と、都市に成立した葬祭業の意外な連関は、これまで拾い上げられたことはなかったのではないだろうか。あるいは、この事例を都市史的にみることもできるかもしれない。

本書は、あらたな民俗研究の可能性を体現したものと言ってよい。伝統的生業に過去の日本人の姿を見ようと努めたこれまでの生業研究と異なり、生活の実態として生業を捉えた本書は、柳田國男の想起した経世済民の学として一つの答えを示しているように思える。ぜひ一読いただきたい本である。なお、評者の力不足により、本書の魅力を十分に伝えられなかったことについては、な

にとぞご寛恕いただきたい。

大阪、和泉書院、二〇一八年、二五五ページ、三五〇〇円＋税、ISBN978-4-7576-0871-9